

言葉に「言霊」が宿る条件

歳を重ね、多くの人々の前で講演をする機会が与えられるようになったが、壇上に立つとき、ふと、二一年前のサッチャー元英国首相の講演を想い出す。

一九九七年、中国への香港返還行事の後、来日したサッチャー女史の講演を聴いた。

しかし、その講演で印象深かったのは、講演の内容以上に、講演の後の聴衆との質疑応答であった。

質疑の冒頭、ある経営者が、次の質問をした。

「サッチャーさんは、

英国の改革を成し遂げられた指導者ですが、

この日本という国も、長く低迷を続けています。

もし、サッチャーさんが日本の首相だったら、

どのような手を打ちますか」

この質問に対して、壇上のサッチャー女史は、静かに、しかし毅然と、こう答えた。

「もし、私が、この国の指導者であったならば、

この国を改革する方法は、ある。

しかし、一つだけ申し上げておきたい。

政治に、マジックは無い！」

その瞬間、彼女の最後の言葉が、胸に突き刺さってきた。「政治に、マジックは無い！」。静かな語り口ながら、明確に言い切ったその言葉が、鋭く突き刺さってきた。

その通り！ 政治や経営に、マジックは無い。

政治家として、経営者として、あらゆる逆風に抗し、やるべきことを、やる。信念を持って、やる。

それだけであろう。

それにもかかわらず、この質問をした経営者の雰囲気から伝わってきたのは、「サッチャーさん、何か、上手い方法はないでしょうか」「何か、改革の秘訣のようなものはないでしょうか」という、手軽な解決策を求める、安易な精神。我々の心の中に常に忍び込む、精神の甘さと弱さ。

その心を見透かしたように、サッチャー女史は、「政治に、マジックは無い！」と言い切った。

短い、見事というべき回答。

しかし、当の経営者を見ると、その釘を刺すような回答に対して、戸惑っている表情。残念ながら、自分の精神の安易さを指摘されたと気がついていない。その表情からは、「サッチャーさん、答えは、それだけですか……」という戸惑いが伝わってくる。

プロフェッショナルの世界には、「下段者、上段者の力が分からない」という名言があるが、まさに、それを象徴する場面。

この経営者、遥か上段者のサッチャーが、何を指摘しているのかが、分からない。

その瞬間、この経営者の表情から心の動きを読み取ったサッチャーは、どう処したか。

ただ一言、朗々とした声で、付け加えた。

「ネクスト・クエスチョン！」

その経営者から目を離し、会場を見渡しながら、そう言った。何が起こったのか。

サッチャー女史は、ただ一言の余韻で、無言のメッセージを伝え、聴衆を切って捨てた。

「つまらない質問は、ここまで！ 他に、まともな質問は！」
筆者には、そう聞こえた。

さすが、サッチャー女史、「鉄の女」と評される人物。言葉の余韻で、人を切る。言葉の余韻で、深いメッセージを伝える。

筆者は、ダボス会議や先進国首脳会議において、世界各国の大統領や首相のスピーチを間近に見てきたが、これらの政治家と比較しても、サッチャー女史の言葉には、比類なき力が宿っていた。

では、何が、彼女の言葉に、その力を与えているのか。なぜ、彼女は、言葉の余韻で、深いメッセージを伝えることができるのか。

その理由は、話術やレトリックではない。
その理由は、究極、ただ一つであろう。

自分が語ることを、自分自身が、
誰よりも、深く信じていること。

単なる「思い込み」ではなく、揺るがぬ「信念」と呼ぶべきもの。

その「信念の深さ」が、言葉に力を与える。
そして、ときに、「言霊」を宿らせる。

そのことに気がついたとき、我々は、
話者として、ある高みに向かって登り始めている。